

### 「貨幣の資本への転化」について：産業資本的形式的問題

Hirabayashi, Chimaki / 平林, 千牧

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

52

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

84

(発行年 / Year)

1984-08-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030446>

# 「貨幣の資本への転化」について

——産業資本的形式の問題——

平 林 千 牧

## 目次

- 一 はじめに
- 二 産業資本的形式と「社会」
- 三 「形式」における資本と労働力商品
- 四 結語

## 一 はじめに

マルクスが『資本論』第一巻、第二篇「貨幣の資本への転化」の論証にほとんど十分な成功を収めえなかったということはすでに明白であると言いえよう。とはいえ、それによってきたる原因を特定することは、必ずしも容易なこととは言えない。ごく大まかにみれば、彼が本格的な経済学の研究、体系化を進めることになったその当初から、彼の対象把握の視角とされたとみなすことができ、実質的にもいわゆる「経済学批判」体系の大枠の方法となつたと思われる対象の二つの過程、側面の分離による把握が、この問題にかかわる主たる難点となつたと考えら

るように思われる。<sup>(1)</sup>この点は、一方でそのような方法による彼の体系化作業の到達点を示すことになっている『資本論』の理論の成果と、他方でその成果にもかかわらず、十分な説明が与えられなかった難点にその方法から結果する要因とが同居するということなのであって、やはり当然のことでもありうるのである。事実、資本・賃労働関係を二つの過程・側面に分離して対象を把握するという方法の所産からすれば、端的にいつて、商品経済に対しての形態面と実体面との把握がある程度可能となったにしても、いわば資本そのものの形態的性格と実体との関係について展開することは実質的にも困難とならざるをえなかったのである。

もちろん、『資本論』に即してみれば、マルクスは「資本の一般的定式」として、その媒介的形式を事実上見出すことができている。しかもそのさい、「商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で始まる」<sup>(2)</sup>とされうるような性格としての商品や貨幣の形態に対し、資本はまずこのような性質によって把握されることになっている。すなわち、「商品生産と、発達した商品流通すなわち商業とは、資本が成立するための歴史的な前提をなしている。世界貿易と世界市場とは、一六世紀に資本の近代的生活史を開くのである」<sup>(3)</sup>と。とはいえ、ここにもすでに問題が生じうる表現があるのであって、いわゆる貨幣の資本への転化に関するマルクスの論証上の難点やそれに対する種々の説明については、すでに多様な議論があり、小論でその点を特に論ずる必要もないであろう。だが、そうした点をひとまずマルクスの方法的視角に即して『資本論』でのこのような理解についてみるならば、彼において資本家的商品経済の社会としての成立に対し——したがって資本・賃労働関係の成立に対し——商品経済の形態の有する性格の相違を承認することを含むものであり、必ずしもすでにその方法と対応することとなっていない。もっともこの点は、第二篇における彼のそのこの理論展開を追えば、すでに多々議論されているように、事実上積極的な論点として扱われることになっていないことも明らかである。彼の方

法的視角は、つまりすでに論証された商品・貨幣論の性格からするかぎり、ここに登場した「資本の近代的生活史」を理論的に処理しうるものとはなりえなかったのである。しかし、他面では、そうした彼の理論的特徴は、形式的にみれば転化論における主要な論理に現われた欠陥に対して逆の側面をつまらぬお検討されるべき性格を含みうるものであったかもしれない。あるいは、先述のごとき彼の方法的視角には対応しえない「生活史」としての歴史への視角は、その方法的視角の制約から不可避的に生じた転化論の欠陥に対し、それを補うべき重要性を帯びたものとみなしうるのではなからうかということである。もちろん、こうしたことはそのものとしては、きわめて機械的な見方なのであって、方法的視角からの逸脱がただちに理論的にポジティブなものともみなしうることはないであらう。

しかし、他面からすると、マルクスの理論的難点に対して、それとは異質な性格を含むと思われる彼の視点は、そのものとして考察の対象にしうる余地もありうるわけであって、しかもそれが、ある程度まで彼の『資本論』における原理的对象把握に即しうるのであれば、やはりなお考慮されるべきことにもなる。周知のように、彼の「資本の一般的定式」における理論的内容は、結局のところ、第二篇第四章第三節「労働力の売買」に結果するべく展開されたものとなっている。また、その重要性としては、今ここで彼の「転化論」総体の理論的性格について詳細に見るまでもなく、彼のその理論的所産として説かれるべき事柄が次のようなことであり、かつそれを導き出すためのものであった点を明白に示していることである。「資本の歴史的存在条件は、商品・貨幣流通があれはそこにあるというものではない。資本は、生産手段や生活手段の所持者が市場で自分の労働力の売り手としての自由な労働者に出会うときにはじめて発生するのであり、そして、この一つの歴史的な条件が一つの世界史を包括しているのである。それだから、資本は、はじめから社会的生産過程の一時代を告げ知らせているのである。」<sup>(1)</sup>

右のように、マルクスが「転化」論の最初に指示した「資本の近代的生活史」は、この「社会的生産過程の一時代」を告知することと結びつくはずのものでもあったとしうるのである。この点は、おそらく、前述のごとき彼の方法的視角とは異なるところの視点から着目されたものなのであろうが、ある意味では彼にとっては、当然向けられるべき論点でもありえた。というのは、古典派のいわば自然的対象把握に対する彼の独自性からすれば、労働力の商品化という歴史的過程を把握することは不可欠の要因であったからである。もちろん、そうしたことを十分承知しているということと、それを理論的に十分処理しようということは同じではない。先きの彼の理解もその意味では、十分に明確なものとなっているわけではないであらう。それは、一方では「自由な労働者に出会う」ことによって「はじめて発生する」資本と、他方で「はじめから……一時代を告げ知らせている」資本とを並記していることによって示されている。全体からすれば、彼はここで——彼の転化論の本筋からして——産業資本としての資本を指示しているのであろうが、同時に後者の資本は、「近代的生活史」を開始しつつ、「一時代」を告知するはずの資本つまりその「一般的定式」として規定されるべき性格と重複させられるようにならざるをえないことになっているのである。

もちろん、こうした重複とみられる彼の「歴史」への視点も、彼の方法的視角やそれに基づく「転化」の論理構築からすると、ほとんど積極的な位置を占めることにならない。前者のような視角との関係では、彼の「批判」体系の成立過程にみられた理解とともに、結局その歴史的把握は事実上は、『資本論』第一巻第七篇第二四章におけるものとして、いわば剰余価値—搾取・収奪の視点によって補足されるかのごとき処理とならざるをえなかったであらう。こうした点を考慮すると、本来の理論展開の側面で、彼が本質的に産業資本そのものへの転化だけを明らかにしているということは、その理論の実質においてもっぱら資本の価値増殖の「秘密」・根拠の追求として行な

われていることと無縁ではないのであろう。しかし、このことは、単に「転化」の理論に対し重大な欠陥を生じさせる結果となっただけでなく、当の「歴史」についても混乱を生じさせることになっていたのである。すなわち、この「歴史」の不可欠な一面としてのいわゆる本源的蓄積が第七篇第二章において説かれたこと自身と、またそのなかで指示されている周知の「否定の否定」の理論とにおいて見出される問題である。さらに、もっとも重視されるべき「歴史」は、第二篇第四章第三節において具体化されたものである。ここで展開された労働力商品の価値規定に不可欠な要因としての「歴史」は、これまでに言及した彼の「歴史」への視点のいわば結論とも言いうるものである。

すなわち、マルクスは労働力商品の価値規定に不可欠な生活手段の「量」に関して、周知のような「歴史」的規定を与えているのである。よく言及される部分であるが念のために引用すれば次のごとくである。「生活手段の総額は、労働する個人をその正常な生活状態にある労働する個人として維持するのに足りるものでなければならぬ。食物や衣服や採暖や住居などのような自然的欲望そのものは、一国の気象その他の自然的な特色によって違っている。他方、いわゆる必要欲望の範囲もその充足の仕方もそれ自身一つの歴史的な産物であり、したがって、大體において一国の文化段階によって定まるものであり、……したがってどのような習慣や生活要求をもって形成されたか、によって定まるのである。だから、労働力の価値規定は、他の商品の場合と違って、ある歴史的な精神的な要素を含んでいる。とはいえ、一定の国については、また一定の時代には、必要生活手段の平均範囲は与えられている」<sup>(5)</sup>幾分長い引用となったが、以上のような文章から明らかなように、彼はすでに与えられた「歴史」を実質とするところに、つまりこの歴史を確認しうる労働力商品に対する関係に、資本の「転化」の内容を確定することとしている。したがって、これは、彼が資本としての価値増殖の根拠に対する産業資本によって「転化」の実質

的理論を与えたことと対応しているのであり、しかもその点からみれば、当の「歴史」は逆に「一時代」を告知するものとしてよりいわば所与のものとされてしまっただけなのである。

このように、マルクスの転化理論の不成功は同時にそこに含まれている「歴史」への認識についてもその不徹底をもたらしめている。もちろん、この場合にもすでにそうした歴史への考慮が必然的でありうるかどうかということも問題たりうるであろう。しかし、彼の考察の展開からみれば、少なくとも反面では転化の確定のために不十分な「歴史」が要請され、さらにその確定の内実からすれば——つまり価値増殖の根拠の確認からすれば——彼にとって「歴史」は必然的でもあったわけである。そして、こうした転化論とそこに結びつけられた「歴史」に着目した場合、彼の理論的処理が不成功に終わっているとしても、やはり本質的には重要な考察側面を示唆していることに変わりはないように思われる。少なくとも、そのことは、「転化」論において「歴史」を考慮するとすれば、所与のそれとしてもあくまでも「一般的定式」等を通じて了解されるものでなければならぬということである。

またさらに、それとの関係ですでに言及した産業資本—価値増殖の根拠という理論と不可分な性格に置かれた「歴史」の所与としての把握の難点を問うとすれば、やはりそれは「一般的定式」等とともに産業資本をもその形式として純化させるものとするにしなければならぬであろう。もちろん、こうした観点による『資本論』の難点については、すでに種々の検討が行なわれてきたのであって、とりわけ宇野弘藏氏によって進められた研究が問題の解決のための根本的筋道を与えているとしてよいと思われる。とはいえ、その筋道自身についてまだ十分な理解が得られていないことも事実なのであり、なお考察を要するものとされている。今日でもその点大きくは形式論についていわば価値増殖の根拠論と歴史的「社会」の形態的設定論との理解の対立として現われているように思われる。そこで、以上のような点に留意しつつ、以下においてとくにいわゆる資本の産業資本的形式を中心として「転

化」論の理論的意義の一端について解明を進めることとしたい。

- (1) マルクスの「経済学批判」体系の成立過程については、すでに若干の検討を試みた拙稿『「経済学批判体系」の一考察』一〜四(『経済志林』第四〇巻三号、第四一卷二号、第四二巻一号、第四三巻四号、所収)および、時永淑『経済学史』(改訂増補版、法政大学出版社)三九二ページ以下を参照されたい。
- (2) Marx-Engels Werke, Bd. 23, S. 102. 岡崎次郎訳、国民文庫版『資本論』I、一六一ページ。以下、Werke, 『資本論』Iのふみ表記。
- (3) a. a. O., S. 161. 同前訳、二五七ページ。
- (4) a. a. O., S. 184. 同前訳、二九八—九九ページ。
- (5) a. a. O., S. 185. 同前訳、三〇〇ページ。

## 一 産業資本的形式と「社会」

総じて、マルクスにとっての転化論の必然的性格が資本に対する価値増殖の根拠の理論的追求ということになったのは、彼がすでに商品論で論じた価値法則の解明と不可分の関係にあることに問題はないであろう。したがって、彼の転化論の難点が必然的にそうした価値法則論と結びついていることも、こと改めて指摘するまでもないであろう。それゆえ、すでに明らかかなことは、マルクスの転化論に対するなんらかの難点の克服が彼の価値法則論との関係を無視して進めうるものではないということである。そうした観点からすれば、このような克服を最も明白に進めえたことになったのが宇野弘藏氏による研究であることを重視しないわけにはいかなかったのであって、今日ではすでに当然であるにしても、宇野氏による原理論の体系的確立のための作業全体もさることながら、その意義を確認する重要な領域の一つもこの「転化」に密接に関連することになるのである。この点は、さしずめ氏の



マルクスに対する流通形態論としての論理的独自性やそれに対応する価値形成過程（資本の生産過程）論における価値法則の論証方法に明確に示されているのである。この両者にみられる氏の理解を、すでに概括したマルクスの「転化」論に示される要点と対比するならば、端的には「労働力の売買」を軸とするマルクスの論理構成——彼の商品論と「価値増殖過程」を論理基底とする資本の生産過程の規定との両面的構成——について、いわば氏の転化論すなわち「資本形式論」によって批判的再構成が行なわれているとしようである<sup>(1)</sup>。

もっとも、右のような解決が与えられたにしても、そこで十分な納得がえられているとしようわけではなからう。すでに多々論議が加えられてきたように、宇野氏の見解といえども、なお異論の尽きない現状である。いまここで、それらの論議にいちいち立ち入ることはできない<sup>(2)</sup>。むしろ、宇野氏の見解によりつつなお考慮されるべきと思われる点について、とりわけ先きのマルクスの転化論の性格に関連する点と合わせてみてゆくこととする。そこで、従来より検討されてきた宇野氏の「資本形式論」との関係で最も特徴的とされうる「産業資本の三面」たる商人資本的、金貨資本的、産業資本的の各形式のうち最後の産業資本的形式について取り上げ、マルクスに対する宇野氏の理論的展開に考慮すべき事柄を明らかにしてみなければならぬ。そのさい、マルクスの理論との関係で当然問題とされるべきことは、彼が産業資本そのものの成立によって「転化」を明らかにしようとしたのに対し、それを「形式」として説くべきものとした宇野氏の論理についてまずその意味をのちの論点との関連で考慮しておくことであろう。この点は、こと改ためて氏の原理的独自性に対してあれこれ考察しようとするものではなく、産業資本を「形式」として説く意義に着目する限りのことである。

いうまでもなく、マルクスの転化論が産業資本そのものへの転化として説かれ、その理論的決め手が実質的な「労働力の売買」にあるのに対し、宇野氏のそれに対応する展開が産業資本の「形式」として説かれているのは、

先きの引用（注1での引用）からも明らかなように、その実質的な労働力の売買にかかわる理論上の難点を払拭するためのものであった。この点は、宇野氏の問題視角からすれば、『資本論』のごとき経済学の原理体系にとって根本的問題を抱えることであった。のちの宇野氏自身の見解によれば次のようなこと、すなわち究極的には「資本主義に特有なる人口法則を展開する道を開きながら、しかも恐慌現象の根本的原因としての資本過剰を説きながら、これを恐慌論として原理的に展開しえなかった『資本論』の体系は、何としても未完成なるものといわざるをえない」とされるべきことに通ずるのである。さらにまた、こうした氏の見地を『資本論』第二篇第四章第三節との関係について敷衍するならば、次のように言うことができるのである。結局、「労働力の価値は、一定の総額の生活資料の価値に帰着する」（『資本論』、国民文庫版、三〇二ページ）<sup>(3)</sup>といっても、さらにまた『それは……この生活資料の価値、すなわち生活資料の生産に必要な労働時間の大きさとともに変動する』（同上）<sup>(4)</sup>といっても、その『一定の総額』自身が如何様にして決定されるかということにかかってくる。それは単純に自然的に、あるいは歴史的に決定せられるものとなすわけにはゆかないのである」と。またそれゆえ、「労働者が自ら生産したその生活資料をも商品として買戻さなければならぬ」ということは、資本の再生産過程のうちに労働力の商品化と共にその再生産も実現され、その生活資料の『総額』を決定する生活水準も規定されるものと考えざるをえないのである」<sup>(4)</sup>ということになる。いまここで、マルクスに対する宇野氏の批判的独自性について詳細な検討を加えようとするものではないが、また労働力商品の特殊な性格そのものの原理的把握にかかわる考察を立ち上げて与えようとするものではないが、右のような見地からしても、すでに宇野氏の理解において資本形式論に登場する労働力商品をいかに解しておくべきかの問題に対する一定の示唆が与えられているように思われるのである。

資本が労働力商品との関係ではじめて歴史的・社会的な支配しうることになるという点では、マルクスも宇野氏も

基本的には同一の理解をもっているとしてよいのである。そのさい、前述のように、前者ではその「歴史的」というものに必ずしもその「社会」に対する規定的な関係を示しうることになっていなかった。他方、後者の見解では、そうしたマルクスのいわば与件としては明示的な理解とは逆に、必ずしも直ちに了解しうることにはなっていない。むしろ、労働力の商品化の独自性のために、資本形式論としても商人資本的や金貨資本的形式とは論理的に切り離されて説かれるようになっており、しかも、前者に対し「ネガティブ」な歴史性を認めつつ、後者において歴史の自立性を与えうるとき規定を示すことになっているのである。すなわち、「資本の産業資本的形式は、商人資本的形式や金貨資本的形式と異なって、資本形態がいわばそれ自身で展開するものとはいえない。この形式のいわば基軸をなす労働力の商品化は流通形態自身から出るものではないからである。勿論、資本としてはこの形式を展開しなければ、生産過程を把握しうることにはならない。したがってまた資本主義社会を実現するということにもならない。」<sup>6)</sup>この点はのちに改ためて言及するが、この理解によれば、マルクスが「転化」論の道筋においていわゆる「矛盾」を設定し、その解決のために労働力商品を導入しつつ産業資本の成立へと展開せしめたことも、基本的には資本主義社会の「歴史」的性格を把握するという彼の根本的意図と合わないことになるのである。マルクスにとってそうありえたのは商品論における労働価値論との関係であったと言っているのであるが、そのこと自身がすでに周知の難点をもつものであり、また他方で彼の認める資本の「本源的蓄積過程」に着目することからしても、すでに「一般的定式」における「矛盾」によって労働力商品を説くわけにはいかなないであろう。

こうした事柄は、すでに今日ではごく自明のことと思われるのであるが、実は必ずしもそうではないようである。商人資本的・金貨資本的形式に対して、産業資本的形式を論ずるさいに、前二者の形式から進んで後者の形式の成立を明らかにするための理論が、多かれ少なかれ前者の資本の価値増殖の不確定性あるいはその根拠の欠落を

いわず否定的に媒介させるものとしている。宇野氏においてさえもそうした道筋がまったく否定されているわけではないとしてよいであろう。マルクスの転化論において扱われた「価値通りの交換」による欠陥は、そこでは確かに解決されているように見える。しかし、その解決が単にそうした不確定性や根拠の否定的媒介であるとすると、それほど十分な問題の解決にはなっていないことになる。というのは、そのような説き方がどうであれ、結果的には産業資本の形式に対して、両者を挿入することによって形式論の完成を与えるという手続になるにすぎないからである。したがって、たとえそのさいに労働力商品が「流通形態自身から出るものではない」ということを明確にしているにしても、いわず理論的には形式論としてその論理的展開に必然的な帰着というかたちに相当引き寄せられた理解を生むことになりがちなものとなる。こうした見地は、ひとたびはマルクスの陥ったいわゆる商品経済史的処理を克服しているように見えながら、かたちを変えた——価値増殖の合理的根拠を求めて展開する商品経済というかたちでの——それに陥ってしまうのではなからうか。

マルクスにしても、一面では実質的にそうしたことを回避することにもなっていた。すでに言及したように、直接的にはそれは彼の欠陥をなしたものであるが、労働力商品の実質的な価値規定を与え、そこに「歴史」を登場させ、少なくとも価値増殖の合理的根拠を与えることによって、他の資本形式との根本的区別を明らかにしているのである。しかし、彼においては、その「歴史」が疑問となるのであるが、また同時に、そうした疑問の解決として産業資本を「形式」として把握し、彼の「歴史」に決着を与えたとしても、彼がこの資本に与えた価値増殖の根拠という点とそれとは無関係のものとしてよいとしうることに直ちになるわけではないであろう。ここで詳論するものではないが、端的に言えば、資本が価値増殖の運動体である（資本の一般的定式）とか、資本が流通過程を対象とすることなく一定の増殖を確定しうる（金貨資本的形式）とかはすでに理論的に説きえたことになっているので

ある。マルクスに必ずしも明確でなかったことはそうした資本形式論であった。しかも、周知のように彼の転化論では「価値どおりの交換」に規定された理論のために、必然的に資本の価値増殖がその合理的に歴史的根拠をもって確定されなければならないのである。そこで、マルクスのこうした価値増殖の根拠に関する性格を、資本の形式論のうちに価値増殖に対する形式でもあるものとして明らかにしている理論の側で、同時にいわばその根拠論というかたちでの処理として産業資本の形式を与えることは必ずしも平仄の合う関係にないであろう。この点は、例えば、マルクスの「価値どおりの交換」がすでに価値実体とともに説かれており、それとの関係で価値増殖についてもその根拠をまさに「歴史的」実体として明らかにしなければならなかったという脈絡からも伺い知ることができるはずである。

右のようなことであるとすると、やはり宇野氏が言われた二つの点についてなお考慮しなければならないだろう。すなわち、その一つは、商人資本的、金貸資本的形式に対して「ネガティブ」ながら「歴史」を考慮しなければならない点であり、もう一つは、それとの関係で、「すでに産業資本形式が出ていた時代」とする点である。これらの点については、すでに別のところで考察を加えたのであるが、小論との関係でなお次のことを指摘しておかなければならない。つまり、宇野氏が「ネガティブ」ながら「歴史」を考慮すべきとしていることは、例えはそれを商人資本的形式においてみるならば、氏のいわゆる「等価交換」の原則をその「形式」のうちに必然化せざるをえないということである。これは、別の面から言えば、労働実体に基づいて価値法則の必然性を明らかにするための形態的規定というそうした「形式」が説かれるのであって、そうした実体のもつ社会的根拠に対し商品経済が現出する特有の「社会」的關係に価値関係の形成を確定している性格として理解されうることである。とはいえ、確かにこの性格はそれ自身としては、「歴史」社会に対して依然として外的なものである。しかし

ながら、そこで必然化を伴わざるをえない商品の価値基準への帰着は、すでに商品対商品の関係の「社会」措定の不可欠な形態としての意義をもつわけであり、このような側面を無視して宇野氏のいわゆる「産業資本における三面」としての資本形式論の展開を考えるわけにはいかないであろう。「ネガティブ」ながら産業資本による歴史「社会」の確立に対しそれゆえ「形式」としてすでにその社会に通ずるべき性格が保持されうるものとなるということに対して、氏の見地が重要となるのである。

マルクスは、このような点を直截に資本の価値増殖の性質の問題として提起し、解決を与えようとした。もちろん、すでに言及したように、彼においては右のような価値基準と「社会」とはまさに実体的に解決しえていたのであって、残することはそうした増殖の性質とされるほかなかったのである。彼のそうした理解の根底には、最初に指摘した彼の「経済学批判」としての古典派批判の不徹底が介在している。とりわけ、A・スマイスに対する彼の「歴史」の提起にすでに『資本論』のこうした難点を生じさせる要因が生じていた。それにしても、マルクスの批判の対象とされたA・スマイスが、「年々の労働」とこの労働を「本源的購買貨幣」とする周知の理解をもって、価値を基準とする「社会」の「形式」とその「実体」とを始めて「原理」的に把握したことはきわめて注目すべき——もちろん「古典派」としてである——ことであった。マルクスは、このスマイスにおける対象の商品経済的絶対視による把握を彼の「歴史」的視角から克服しようとした。しかし、そのさい当の「歴史」が商品経済の「形態」に基づく「社会」的基準のうちに始めて理論的对象となりうることを十分にスマイスから汲み出しえなかったのである。彼の視角はむしろ資本の価値増殖の根拠という点に置かれることになっており、究極的にそれを越えることはできなかった。したがって、まえにも指摘したように、彼の転化論は周知の「一般的定式」を抽象するところまで至りながらも、むしろその「定式」に不可欠であるはずの「社会」形成のための基準設定となるべき「形式」の意義を

否定するという結果にさえたのである。

そこで、宇野氏が指摘したもう一つの点すなわち「産業資本形式が出てくる時代」という点が、やはりいっそう考慮されなければならないこととなる。氏の発言の要点は、商人資本的・金貨資本的形式に対してすでに産業資本的形式と並んで一時代を画す位置に関係づけられるべきとするものである。これはまた逆に言えば、後者の形式が前者の形式によって「社会」として一時代を画すべき側面が与えられ、いわばそれらとの関係でそれが「社会」について持つべき別の側面を担うということになる。したがって、その意味は単に価値増殖の根拠の有無という他方の「時代」の無限定に結果するようなものではないであらう。他面からすれば、「ネガティブ」ながら「歴史」に通ずるといふ性格は、なるほどそれ自身としては「社会」をなしえないものとするのであるが、産業資本の「形式」の出ている時代としてはこの「形式」ととって「歴史」社会をなすための一面がそれに通じかつ与えられていることを不可欠とするのである。もちろん、この場合に、産業資本の形式にとつて価値増殖の「根拠」をもつということ、つまり労働力商品を包摂しているということが決定的であり、しかもそれが「資本形態がいわばそれ自身で展開するものとはいえない」とするべきであることもまったく当然なのである。この点は、否定されうるものではないのであるが、他方ではただもっぱらその根拠だけで資本による歴史「社会」の確定を行なうというわけにいかないということである。宇野氏の別の表現によれば、資本の三形式の展開は、その歴史「社会」を実質的に画する「産業資本の三面」を説くことになるわけであり、それゆえすでに自明なことであるが、三形式はそれぞれその「社会」の成立に対してその「形式」のうちに理論的性格を担うことになる。しかもそのさい、すでに説かれたことの性格はのちに明らかにされる「形式」にとつてすでに与えられた「社会」の抽象的一面とされているわけであり——言い換えれば、その形式によってこそ「社会」の抽象的一面が説きうるということになっているのである。

り——、それとの関係なくして説きうることにならないであろう。つまり、単に価値増殖の「根拠」の有無という点で産業資本的「形式」を説くというわけにはいかないことになる。

それゆえ、例えば宇野氏がこのように言われていることもきわめて象徴的であるように思われる。すなわち「資本形式」というのは貨幣から発生しながら、労働力の商品化というのは貨幣や資本自身から発生しないで、社会から発生するという非常におもしろい問題<sup>(10)</sup>であると。ここでは、前段の指摘つまり「発生しない」という点はそのものとして明白であろう。むしろ重要なのは後段の「発生する」ということにある。労働力の商品化が「社会」から発生する」ということに着目することに興味ある「問題」がやはり含まれるわけであって、これは別の視点つまりその「社会」を産業資本の「形式」に映ずるものとしてとらえる視点からすれば、その「社会」関係を欠如させて増殖根拠を取り出すわけにはいかないであろう。そうすると、結局根本的には、産業資本的形式を与えうることになる労働力の商品化がその「形式」においていかに受けとめられるかということになる。端的にみても、資本の価値増殖は「形式」において直ちにその根拠を明らかにしうるものではない<sup>(11)</sup>。生産過程との関連からしても一定の抽象的水準から与えられるにすぎないのであり、したがって、当然形態的な社会的基準によって明らかにされざるをえないのである。

(一) 例えば、宇野弘蔵氏が独自の原理体系形成の作業を進められたさいに、労働力商品を考察の対象としつつ、氏の理解を深化させたであろうことは、ほぼ疑問なく言いうるであろう。「労働力商品の特殊性について」、「労働力の価値と価格——労働力商品の特殊性について——」の比較的初期の論文などもきわめて重要な役割を担ったとしてよい。前者においても次のような考察が加えられているのであって、労働力商品の売買を焦点とする宇野氏の資本形式論に対する理解をみる場合に依然としてきわめて興味深いものと思われる。「W—G—Wは、一面では労働力なる商品を生活のために販売するという実質を与えられながら実際は労働力の単なる再生産のために行なわれるに過ぎないものとなっている。この関係は、しかし、



いずれの一方によつても片付け得ないものを含んでいる。いわば生産過程が資本家的形態を与えられることから規定される面と、一般社会的原則にしたがつてこれを実現せざるを得ない点から規定される面とが重つてあらわれているものといえる。而も形態的には前者が積極的規定として、後者はこれに対して寧ろ消極的条件をなしているのである。」(宇野弘蔵著作集)第三卷、岩波書店、四九〇ページ。)さらに、このような理解を前提とし、また「労働力なる商品によつてこのW—G—Wを理解せんとするとき、われわれは始めて、この形式の抽象性を明確に認めざるを得なくなる」との指摘と、「W—G—Wの形式にも実は資本の流通形式を類推移入して理解し、その抽象性を明確にしないもの」(同前書、四九六ページ)に対する批判とを考慮するならば、すでに今日においても資本形式論について検討されるべき視点を十分伺い知ることができるのも周知の事実であらう。

(2) ただ、最近の議論において行論との関係上最も重視されるべき論考として、時永淑教授の一連の見解と論争の整理が注目されなければならないと思われる。それらについては、時永淑『資本論』における「転化」問題』(お茶の水書房、一九八一年)を参照されたい。

(3) 宇野弘蔵「恐慌論の課題」(『著作集』第四卷、所収)、四一八ページ。

(4) 同前書、四一五—一六ページ。

(5) 宇野弘蔵編『資本論研究』I、筑摩書房、三三〇ページ。なお、この「歴史」をいかに解すべきかという点に関する私見そのものについては、拙稿『貨幣の資本への転化』に関する一考察——商人資本的形式を中心として——(『経済志林』第四八巻第四号、所収)において幾分の展開を試みている。

(6) 宇野弘蔵『経済原論』(岩波全書版)、四四四ページ。なお、以下では『原論』とのみ表記。

(7) 「価値増殖の一般的根拠を求めて」という展開は……『一種の目的論』……的な展開になってはいないでしょうか」(『大内力』『経済原論』を検討する)、『信州大学経済学論集』第二号、所収、八九ページ)という青才氏の指摘は、依然として重要であらう。

(8) 前出、拙稿『貨幣の資本への転化』に関する一考察——商人資本的形式を中心として」を参照されたい。

(9) 資本形式論に関して、宇野氏の議論のなからきわめて的確かつ重要な理論的性格を探り出し問題の根本的解明を与えたものとして、時永淑「貨幣の『価値尺度』機能と資本の商人資本的形式」(前出、『資本論』における「転化」問題)、所

収)がある。本稿においてもいちおう時永教授の見解をふんまえているつもりであるが、当然のことながら、理解そのものが十分尽されているかどうかは別問題である。

(10) 宇野弘蔵『資本論五十年』下巻、法政大学出版局、八一七ページ。

(11) 宇野氏の産業資本的形式の規定に対し、それがまだ「形式」として純化されていないのではないか、という疑問が提起されている。(大内・桜井・山口編『資本論研究入門』、東京大学出版会、八四ページ)。そこでの議論で指摘されている形態の純化ということについて必ずしも明確な内容が確保されているとは思われないが、またそうした指摘の生ずるゆえんについてまったく理解しえないというものではないのであるが、そこで示されている批判は方向としては宇野氏の理解とはむしろ逆になっており、歴史「社会」をどう理論的に把握するかについての氏の見解を根本的に否定することに結果するのではないかと思われる。

### 三 「形式」における資本と労働力商品

産業資本としてではなく、その「形式」的一面として説く場合、いわば前提条件的に労働力商品の存在を想定することになるのであり、すでに言及したことからも知れるように、直接産業資本を説く——したがって労働力商品の価値規定を与える——マルクスの難点を克服するためにこの点が基本的に重要なものとなる。しかも、同様のことではあるが、その前提条件Ⅱと件に対する関係として、産業資本をその「形式」として留めるといふ点が重要なのであるから、当然労働力商品を含む「形式」のそのものとしての限度も明確にされなければならないであろう。その場合、すでに明らかのように、マルクスにとって労働力商品の実質的な価値規定が不可欠であったのは資本の価値増殖の根拠を示すためであったということが留意されなければならないだろう。つまり、彼の意図からすれば、その「根拠」は価値の増殖分としては、労働力商品の価値規定を通じて明らかにされうるものとする以外にないということである。そのように理論を組み立てるためにはすでに産業資本そのものによる説明が必然となるの

であって、それゆえ彼の「根拠」論は逆の意味では、『資本論』にみられる筋道のように資本「形式」論の展開とは併立しえないことにならざるをえないのであった。

産業資本的「形式」も、いわば与件としての労働力商品の出現と不可分な関係にあるのであり、この点からして直ちにマルクスの「根拠」論と無関係なことになるわけではない。しかしながら、ここには当然「形式」として留まる限度があるわけで、むしろその与件たる労働力商品との関連が「形式」に限定されるべきゆえんを生じさせているはずである。他方、その限度はまた、すでに言及したように、他のあらかじめ説かれた「形式」と無関係ではないのであり、それを受けとめることから考慮されねばならない。とすると、 $G \rightarrow W \rightarrow G'$ における価値基準を必然化しうる性格や $G \rightarrow G'$ での時間を根拠とする価値増殖の一定化の性格は、すでに産業資本の形式としてもそこにおいて受けとめられうるものとしなければならぬだろう。しかし、その場合には、当然のことながら、そうした性格を受けとめるのは産業資本的形式としてであって、その形式においていかなる意味を持つかが明らかにされねばならないであろう。そこで、この形式の独自性として考えうる労働力商品の登場においてそれらがどのような意味を持ちうるか、あるいはすでに言及したように、そうした性格が解明されている結果として、労働力商品のその形式への包摂がいかに可能となっているかが考慮されるべきこととなるのである。

マルクスが「貨幣の資本への転化」において労働力商品を登場させることになったのは、彼の価値法則に基づく「等価交換」を媒介し産業資本の価値増殖の根拠を説きうるものとし、これが同時に労働力商品の実質的価値規定という「歴史」社会の確定に通ずるものとなしていた。すでに明らかにした点をふんまえ、こうした彼の理論的処理のなかに含まれている難点が「形式」のうちに純化されうるために産業資本のそれとしては、労働力商品をもさしずめそれに対応するものとして把握されねばならぬだろう。そのさい、マルクスとは異なるとしても、商人資

本的形式では価値を基準とする交換を必然化しうるものとして、いわゆる「等価交換」に対する資本の性格が明らかにされうるものであることが重要とならう。そうであれば、産業資本的形式において、すでに与えられたその価値を基準とする交換の「社会」的全面的性格規定が不可欠となるはずであり、しかもそのことを積極的に表わしうるものとなるところに、労働力商品登場の意味があることになる<sup>(1)</sup>。マルクスのそれへの実質的価値規定はすでに問題外としても、またそれゆえ産業資本においてその実質を明らかにするとしても、「形式」の抽象性としての限度において、その「等価交換」が成立しうるとすることに「社会から発生する」意味が示されるのである。

いうまでもなく、諸商品の価値を基準にする関係は、いわば商品形態における「社会」の確認方式にはかならない。このような関係に基づいて労働力商品に関する理解を与えることは、別にこと新しいものではないであらう。価値増殖の根拠を示す「形式」として説くことになっている場合でも、したがってほとんど一般的な手法とも言いうるのであって、結局は労働力商品について等価交換を想定せざるをえないことになっているはずである。もっとも、そうした論理で説かれている場合に、その「等価交換」について理解されていることは、おそらく「根拠」に力点が置かれたうえであり、「交換」の側面についてはむしろ消極的な意味あいを持たされている傾向にある。したがって、「社会から発生する」という点に即してみると、その場合の労働力商品は「社会」に価値増殖の根拠としてとらえられているのであって、必ずしも納得しうるものとはなりえないのである。というのは、産業資本的形式がその根拠を含みうる形式であることを直ちに否定するものではないが、その形式の抽象性からすれば、根拠自体も当然限定されているのであって、いわば「社会」実態的性格において示しうるわけではないからである。おそらく、社会に根拠ということになれば、マルクスの展開と類似するような、その前提とされる労働力商品の交換についても事実上実質的な交換基準を想定することにならざるをえないであらう。

したがって、この形式に根拠が含まれるとしても、その「流通形式」という限度からすれば、力点はむしろ労働力商品の「等価交換」の側にあるものとしなければならないであろう。一般商品に対して価値を基準とする交換関係を成立させ、同時に労働力商品に「等価交換の関係を可能」にしうることによって、この形式はその価値関係自身においてポジティブに「社会」を表現しうることになるのである。それゆえ、実は労働力商品が「社会から発生する」という意義を担うことになるわけであって、またその点からして例えば  $G \rightarrow W \rightarrow G'$  の「ネガティブな歴史性」に対してポジティブな「歴史」を可能としうる性格を持つことになるのであろう。労働力商品を含むことによって、あるいは資本として使用価値的制約から解放されうるとか、またそれゆえ需給関係をそれ自身に調整しうる性格をもつとか指摘しうることになるのであるが、それらも重要な指標をなすものに相違ないとしても、究極的には先きに言及したごとく労働力商品に対するそうした関係を成立させうることに尽きてくるものと言えよう。産業資本的流通形式に対して併立するはずのもう一つの流通形式  $W(A) \rightarrow G \rightarrow W$  といういわゆる単純流通の形式を考慮するならば、そうした意味の重要性も明らかであろう。この流通形式においてその実質的価値規定が得られるものではないにもかかわらず、これを「等価」関係で結びつつ同時に価値基準の関係を全面化しうる形式をなしているのである。いわゆる単純な商品流通に対して貨幣の価値尺度機能の基本的規定を与え、かつ資本の商人資本的形式においてその機能の必然化を明らかにしうるといふ論証を進めえたことからすれば、産業資本のこの形式が社会的基準の確定としてもつ意義は明瞭であるし、またきわめて重要なことであろう。

例えば、マルクスが主に批判の対象とした古典派経済学者たちの価値論とりわけ A・スミスに代表される労働価値論の把握つまり「労働＝本源の購買貨幣」という把握にみられる商品経済の社会的基準の設定と対比するならば、その点に関する議論の有効性も考慮しうることになる。スミスのその把握は、周知のように労働それ自身をいわ

ば価値尺度そのものとみなし、したがってそういう意味で貨幣の価値尺度機能という商品経済の基準設定の働らきを労働Ⅱ本源的購買貨幣というかたちで自然に相対する人間の労働そのものに内在させ、そこに統一的な商品経済のつまりは商品経済「社会」形成の原動力を与えたのであった。こうしたスミスの対象把握の独自の手法は、商品経済に基づく特殊な社会編成を労働—自然の過程たるいわば人間の自然史的過程のうちから根拠づけようとしたものであった。それゆえ、彼はまさに労働から社会が発生するかのように説いたのであったが、それにしてもそこに経済学的发展における重要な地位を占めうるものを明示しえたのであった。それは、商品経済のかの「骨髄」ともいべき貨幣の機能を担う労働—商品経済的労働—をもって社会編成の原点を確定しうるものとしたことである。こうした彼の作業は、確かに商品経済的社会関係を人間の本性に内化させ絶対化させるものであるとしても、むしろその商品経済的媒介性の絶対的排除によって、「社会から発生する」ものに対するその媒介性の究極的在り方を対照的に示唆することになっていのように思われる。

周知のごとく、マルクスはまさにそうした点に——媒介性に——着目し、対象の独自の性格の把握の意義を確定しようとしたのであった。それは別の表現では、対象の商品経済的顛倒的性格を自然史的に解明したスミスのごとき在り方を、真の顛倒性の在り方の解明のうちに批判することになるものであった。しかしながら、マルクスはそれに十分成功しえなかつたのであり、またその場合最もつめられるべき論点の一つとして、この資本形式論における労働Ⅱ社会が位置されなければならないのも当然なことであろう。ここでは、スミスの労働Ⅱ本源的購買貨幣の属性がつまり労働—自然の一面面が資本—労働として、しかも資本を主体とする運動のうちに対応する労働として、まさに顛倒して現われる関係において解明されるべきことが対的に示されるのである。スミスがいわば労働に埋め込んだ尺度機能は、この形式では資本の運動に内包され、労働はそれとの関係においてつまりその労働の対象

との関連ではじめて「等価」関係をえ、しかもそれ自身は「社会から発生」しつつ、そうした顛倒的關係のもとで「社会」を成す位置を占めうることになる。<sup>(2)</sup>

しかも、このような対比から着目しなければならぬ「形式」のもつ顛倒的性格をさらに考慮するならば、価値増殖の根拠という論点についてもなお検討する余地が生じよう。労働力商品を包摂し、かつ等価交換を必然化しうる資本の形式としては、それ自身に価値増殖の根拠を有するものとしうることになるのであるが、その根拠自体はいわばこの形式の直接の論証対象をなすものではないであろう。すでに言及したように、「社会から発生」したものを内包し、社会を成しうるものとして、それによって——「形式」のうちには——「社会」と「根拠」とを対応させているにすぎないのである。もちろん、このように抽象化しているにしても、例えば次のように説かれている宇野氏の理解と異なることを主張しようとしているわけではない。「……その「産業資本の形式に包摂されている」生産過程は、商品、貨幣、資本の流通形態に応じて展開される。しかしそれだからといってそれは従来の諸社会における生産過程自身と全く異った生産過程をなすというのではない。むしろ反対にあらゆる社会に共通なる、いわば社会的実体として社会の基礎をなすものとしての生産過程を把握することによって、商品経済をして歴史的に社会を形成せしめることになるのである。」<sup>(3)</sup>つまり、ここに登場している「社会」に対する「形式」としての理論的性格なのである。「共通」し「実体」として「基礎」をなす関係は、「社会から発生」し「社会を形成」するものとして与えられたのであって、前者——「発生」——はネガティブな歴史性という把握と相俟って与えられたとしてよいであろうし、後者は「社会」を価値関係として設定しうる「形式」そのものの論理によって示されたとしてよいであろう。それゆえ「共通」という抽象自身、宇野氏において資本形式論全体から出されるものとしてのよいのである。もちろん、その内容は「労働生産過程」自体で明らかにされるべきこととされよう。したがって、こ

の点からしても、「形式」自身を価値増殖の根拠に基づいて説くことになってはいるわけでもないのである。

そうであるとするれば、この「形式」では、またその根拠についての独自の表現形式であることも避けられないのではないかと思われる。つまり根拠をその内に含むということが形式を通じて現われるはずなのであって、しかもそれが流通形式という特殊な性格にあるものとしてそのいわば商品経済的に独自の——顛倒的——外観を排除するわけにはいかないのではないかといいことである。したがって、この資本形式において価値増殖の根拠が与えられているにしても、その根拠は独自の仕方で表現されるのであって、単に労働力による価値増殖に対応することにはならないであろう。すでに価値増殖の運動体たる性格において生産過程を包摂することになったものとして、形式自体ではその増殖に特殊な性格が生じたわけではない。むしろ、問題はその増殖に対して労働力商品が対応し、しかもこの商品が宇野氏のいわゆる唯一の単純商品として並存するという特殊な関係にある。したがって、形式としても自立的な価値増殖の運動体であることを示しうるものであるとしても、産業資本的形式は、そのこと自体において、そのものとしては社会的たりえない単純な商品流通の形式をとる労働力商品をも恰も商品流通を社会的に描くものたらしめうることになっているのであって、この両者を統合し商品経済的に自主表現する関係から切り離されることにはなりえないであろう。

つまり、確かに「社会的実体として社会の基礎をなすものとしての生産過程を把握することによって、商品経済をして歴史的に一社会を形成せしめることになる」わけであるが、この形式としては、社会的実体たる生産過程を「商品経済をして歴史的に一社会を形成せしめる」その特有の表現様式というものを伴うわけである。前者の社会的実体はそれを担う労働力との関係で、すでに言及したように宇野氏の主張からすれば、ネガティブな歴史性に対するポジティブなそれという対応のうちに、あるいは「社会から発生」し、社会を成すという関連のうちにいわば



歴史を貫く「実体」として把握しうることになるものであった。しかし「商品経済をして一歴史社会を形成する」ことを表現し担う側は、すでにその商品経済のうちにあるいわば主体に置かれているのであって、これはそうしたことによって独自の性格を帯びているものと考えなくてはならないであろう。そうだとすれば、この形式は資本として価値増殖の根拠を含むものとしても、単にそれだけに留るものではありえないであろう。前述のように、単純流通を描く労働力商品との関係で自己を表現する性質をも呈示しなければならぬことにならざるをえないであろう。両者の関連が商品経済的に同質なものとして、しかもそれが両者ともに価値の関係として確認しうる性格のものとして統一されることが「形式」において満されうるところに、形式論としての「社会」の意義があったはずなのである。したがって、ここでは、当然であるが「歴史社会」としても、階級関係を内実とするそれを直接に表現することにはならない。むしろ、その「社会」において形式的に資本と労働とが同等なものとして、言い換えれば「社会」の形式として同等な性格において自主的にいわば統合しえているものとして現わされることになるのである。

周知のように、マルクスの転化論で事実上もっぱら産業資本そのものへの転化として説かれることになったのは、価値増殖の根拠の解明という一点でその内容が満されうることであった。しかも、それは商品交換の側面でも「支配しているのは、ただ自由、平等、所有、そしてペンサムである」ということに対する周知の「無用の者は立ち入るな」、「ここでは、どのようにして資本が生産するかということだけではなく、どのように資本そのものが生産されるかもわかるであろう。貨殖の秘密もついにあばき出されるにちがいない」という<sup>4)</sup>視点である。これは、結局かれの「経済学批判」による一つの帰着と言ってよいのであろうが、実質上、「転化」論自体がすでに「あばき出される」べき事柄を焦点としてなり立っているのであって、むしろそこにあつてあばかれるべき覆いはきわめて貧弱なのである。つまり、資本の運動によって形成されるものとしてではなく、「商品交換」によって与えられた

にすぎない被膜がわずかに付着している程度にすぎないであろう。したがって、彼の批判的視角に関連させてみるならば、逆に彼は古典派が固持した資本と賃労働との、利潤も賃銀も分配範疇として把握するような、「分け合う」関係という理解に拘泥すべきであったのである。これは、単に「商品交換」の——古典派にとっても、またマルクス自身においてもそうであったようなものとしての——世界によって処理しうるものではないであろう。彼らとしても資本と労働との関係を対象としつつ成り立たせた世界なのであって、それはまさに、資本にとって価値増殖を可能にしつつ同時に労働が価値の一部分を確保しうるかたちをとる関係として、「平等」という覆いの存在を確認するものとなっているのである。<sup>(9)</sup>

マルクスは、逆説的にはあるが、「商品交換」の領域では古典派に傾斜し、その「平等」性を確認した。「転化」論ではそれを反転させようというのである。前者についてここで言及するものではないが、古典派としても、事実上資本・賃労働関係を対象にしつつそれを成り立たせたことが肝要なのである。それゆえ、商品経済的顛倒性という覆いの強さもそこにあるはずであって、この点でも資本の有する性格のうちはその顛倒性を見ないわけにはいかないであろう。そこで、資本の流通形式としては、まさに古典派の陥ち入った姿を、商品経済的顛倒性のいわば流通形態における最高次の覆いとして産業資本的そののうち表現されることにならざるをえないであろう。もちろん、資本としての顛倒的性格は、商人資本的形式においてすでに示されているのであって、産業資本的形式としては、それを受け止めることになる。しかし、この形式に並存する労働力商品の単純商品としての存在は、まさに貨幣を通じて与えられる価値的性格によってつまり貨幣物神に直面することによって、自らもその顛倒的性格を受け取らざるをえないことにならう。それは労働力商品の所持者をプチブル・イデオロギーの担い手とさせざるをえないものであって、またこのイデオロギーが「社会」へのアイデンティティを形成するものとなるのである。したが

つて、宇野氏が先きの引用文に続いて次のように指摘している点も、きわめて注意を要することになるのである。すなわち「勿論、それは資本主義社会として特殊の発展をなすのであるが、しかしまた従来のいかなる社会とも異って生産過程を純経済的に、いいかえれば、如何なる上部構造的イデオロギーによっても、それ自体としては實質的に支配され、影響されることのないものとして展開する」<sup>(6)</sup>のであると。このような理解そのものに問題があるわけではないのであって、資本の生産過程が何等かのイデオロギーによって左右せられる関係で遂行されることにはならない。そこで確かに「純経済的に」としてよいのであるが、その場合にそれが当然のことながら商品経済的に「純経済的」であるわけであって、「経済過程を、いわゆる社会の上部構造としての法律、政治、宗教その他の實質的支配から独立に展開せしめることを可能ならしめる」関係にある商品経済的行動基準そのものを排除するものではないであろう。

あるいはやや過大視する結果となるかとも思われるが、「形式」としては、また次のような性格と端初的には通じていなければならないように考えられるのである。「資本主義社会は商品経済を根柢とし、それを全面的に展開するものとして、歴史的に一社会をなすのであるが、それは封建社会と異なつて……表面的には商品交換という自由と平等とを本性とする社会関係を基礎とする……しかしそれはいわゆる単純商品生産として想定されるような……歴史的な一社会をなすものではなく、労働力自身を商品化する資本主義社会として始めて歴史的に一社会をなすのであって、旧来の階級社会をもこの形態規定のうちに解消して、いわゆる近代化を実現し、その階級性は、商品形態に完全に隠蔽されることになる」<sup>(7)</sup>この文章は、宇野氏の『原論』第三編第三章第四節の最初の部分である。もちろん、こうした規定は、第三章の利子論の展開によって可能とされているのであって、指摘されている「形態規定」としてもその関連を無視するわけにはいかない。しかし、宇野氏としても、その利子論の展開ではすでに与

えられた資本形式を前提としそれを根拠づけるものとして説かれているのであって、必ずしも「形態規定」に対して「形式」によって与えられた性格と無関係に指摘されているわけではないであろう。いやむしろ、氏にあっては、周知のように、その関係が理論的に密接に結びつけられているところに特徴を有しているのであり、したがって産業資本としてそれら「形式」に合理的根拠を与えようとにも、また自からそれによる「形態規定」のうち「解消」する関係をみるべきとされているように解しうるのである。また他方で、そのような「解消」の関連から「古典派経済学の根本的欠陥」が指摘されることにもなるのであるが、その当の古典派が一方で労働価値論を解明しながら、他方で資本主義社会の真の階級関係の把握をなしえなかった点に留意するならば、やはりその両方の関係を併せ持たせる対象の性格つまりそうした独自の「形態規定」の側面を無視するわけにはいかないように思われる。そうだとすれば、その合理的抽象的「社会」の「形式」として、資本の「産業資本的形式」がもつ「分ける関係」という性格に対し考慮する必要があると生じてこよう。

(1) 「産業資本的形式は、生活資料の一定量を労働力の価値に等しいものとするという関係の解明を可能にするための『流通論』次元での資本形式として考察対象となるのであって、このことは、実は、一般商品が価値を基準にせざるをえないという『資本の一般的定式』の基本的性格からする要請によるものである。」(時永淑「資本の三形式の展開方法について」前出書、所収、一四三—一四四ページ)こうした指摘がきわめて重要であって、産業資本的形式が「形式」として持つべき性格の根本を言い尽くしているものとしてよいであろう。

(2) ここで言う顛倒性はまた同時に次のように指摘されている「擬制」と不可分の関係にあるものと考えられる。すなわち、「……『労働力商品としての価値』というのは、もともと商品として生産されえないものを一般商品と同様の流通形態をもって売買するという無理から生じた擬制である。ここで『擬制』という表現を使用したのは、労働力が商品化された場合に、それが商品として売買される関係をもつかぎり、一般商品と同様に価値規定を流通形態として受け取らざるをえない関係に立たされるが、しかし、それ自身は、のちに『生産論』において、『対象化された労働』として価値の実体をもつらる

ものとするわけにはいかない関係にあることを明確にしておくためである。」(時永淑『貨幣の資本への転化』問題再論、前出書、所収、二〇一—二〇二ページ。傍点—原文による。)

(3) 宇野弘蔵『原論』四五—四六ページ。〔 〕、傍点—引用者。

(4) Wake, Bd. 23, S. 189. 『資本論』I, 三〇八ページ。

(5) もちろん、ここではのちに問題となる労働力の価値の貸銀形態への転化というような事柄をすでに扱うべきだとしているわけではない。しかし、のちの貸銀形態が、資本の生産過程を流通過程として現わす場合に担う性格に着目するならば、その流通過程の抽象的性格もまったくこの「形式」と無縁だということにならないだろう。宇野氏が、『原論』第一篇第一章の冒頭で「 $G-W \cdots P \cdots W-G$ 」の形式の内に生産過程を遂行する資本は……」(『原論』八二ページ)としていることも、貸銀形態への転化によって反転された流通过程として、したがって形式そのものとしては転化による実質を与えられたものとして流通过程を実現するべく説かれることになっているものとして考えられるのである。

(6) 宇野弘蔵『原論』四五—四六ページ。

(7) 宇野弘蔵、前出書、二二二—二二三ページ。このような指摘から直ちにこの資本形式をもって「分配論」への展望が与えられるとしているわけではない。しかし、資本の三形式による産業資本の規定という点からすれば、それが「分配論」に対してもつ意義として考慮されるべきことであろう。とはいえ、このような問題については、また別の機会に改めて考察することとしたい。

#### 四 結 語

宇野氏の原理論における論理展開に対して、形態と実体とを機械的に切り離すものとする批判がしばしば行なわれてきた。それらの批判そのものは宇野氏に対する無理解から生じたものと思われるが、他面でそうした問題と密接にかかわる論点を明確にするべき理論領域で必ずしも決定的な解明を与えていなかったとも考えられるのである。もちろん、事実上は、いわゆる「転化」問題について他の領域に比べて多大の議論が集中されてきたことから

すれば、そこに最も解明されるべき点が存在することも認められていたと言いうるであらう。しかも、ここに注目すべきゆえんを生じさせたそもその原因は、当然のことながら、『資本論』自身において、あるいはマルクスの「経済学批判」体系の方法視角の成立事情から生じた論点においてきわめて明確に与えられていたからにはかならないだろう。それは、マルクスにどのような解釈が行なわれようとも、彼自身決着を与えなければならなかったところに「転化」論における歴史社会が登場しているからである。宇野氏が再三言及されたように、マルクスの議論が登場する原書論や「否定の否定」をもって、彼の歴史「社会」把握の本質的要因とすることは経済学による資本家社会の根本的解明を阻げるのであり、また同時に少なくとも彼の転化論において理論的に積極的な「社会」設定の意義が含まれている可能性をも十分見出しえない結果としてしまふであらう。

翻ってみると、そもそもマルクスの「経済学批判」体系の方法的視角自身において、「転化」論は彼自身の「社会」設定論として位置づけられなければならない性格をもつものであったと言えよう。資本・賃労働関係を二つの過程・側面に分離して対象把握を行なう考察方法は、他面では両者を併せ一社会とさせるべき理論が必ず要請されるわけであって、彼はそれにどう解決を与えうるのかに苦慮したのである。この点は、すでにいわゆる六一―六三年の「資本論草稿」においても明瞭に示されているはずである。すなわち、彼がその時期に展開しようとした「転化」のための理論構成は、周知のように次のごときものであった。「I、資本の生産過程。1 貨幣の資本への転化。a G—W—G。資本の最も一般的な形態。b 価値の本性から生じる諸困難、等。c 資本と労働能力との交換。d 労働能力の価値。e 労働過程。f 価値増殖過程。g 資本主義的生産。」こうした構成によって明らかであるが、彼にとつて「転化」論が実質的な「社会」確定のための理論化であったと言えよう。もちろん、すでにこの構成には労働価値論が前提されており、その点は『資本論』と同様である。だが、「労働過程」をも転化

構成内容とする独自の理解は、かえって彼の意図が明瞭であるようにさえ思われるのである。彼は一面ではその価値論に固執しながらも、他面では資本形成（転化）の過程が、価値論によりつついかに実質的な「社会」設定が可能かを追求しようとしているのである。

その場合、「転化」論で社会が実質的に与えられなければならないのは、すでに言及したように多分に彼の前提した労働価値論によるものであるとしてよいであろう。そのために、他方で「労働過程」を「転化」に内在させなければその価値論に基づく社会設定に対し「貫させないことになるのである。こうした経緯の概観からしても、彼の意図は比較的是つきりしており、これを『資本論』と対照させるならば、彼がその「社会」設定を彼の体系の進展のうちに、なおどのように貫こうとしていたのかもほぼ察することができよう。価値形態論の形成とか、「一般的定式」の成立とか、「労働過程」論から「資本の生産過程」論が実質的に展開されることになった等々として指摘しうるのであるが、そうした関連にあって、結局、彼の「社会」の理論化に必要とされる形態論化がはかられつつあったとみなしうるし、そのいわば究極的な理論上の障壁ともいべきものに労働力商品の把握の問題が横たわっていたように思われるのである。これはまた同時に、彼が資本・賃労働関係の把握に対して抱いた方法的視角と対応するものであって、その意味ではむしろ当然のこととされるものであるかもしれない。

こうしたマルクスの『資本論』成立過程やまた『資本論』そのものでの理論および彼の方法的視角等を念頭に置いて、宇野氏の原理的考察をみるならば、氏が労働力の商品化の問題に焦点を当て、資本形式論において如何にそれとの関係で「社会」を設定しうるかの論理化について考察を進められていることは、マルクスの作業の推進という意味で当然のことでもあった。あるいは、さらに広い視野でそれを見るならば、それは商品形態に基づく価値関係に「社会」を確定しようとした古典派経済学以降の経済学の社会に対する考察基準からする発展の所産であると

もしうるであらう。再三言及したA・スミスの周知の命題すなわち労働＝本源的購買貨幣とするそれによって、そうした価値論に基づく対象（社会）把握の根本にかかわる問題が提起されたとしても過言ではないであらうし、またそうであれば、『資本論』や宇野氏の解明にみられるごとく商品形態の極地たる資本の運動形態において対象（社会）把握のためのその形態としての根本的要件が理論化されなければならないはずであらう。ここに、スミスの命題に対する最終的な決着がありうるわけであり、彼のいわば商品経済社会の自然史的把握を、したがってそれはまたD・リカードにも通ずる古典派的对象把握の限界を根本的に批判、克服し、商品経済の有する顛倒的性格の本質を明らかにしうるゆえんがあると考えられる。

他方、そうした古典派に対する関係を考慮するとき、彼らの「社会」把握が必ずいわずに価値論的「社会」設定と自然価格論的「社会」把握との二面化を伴っていたことも見落すことができないであらう。しかもまた、そうした点についてはただ単に彼らの方法的欠陥、誤まりとしかして処理されてはならないであらう。むしろ、彼らがそのように把握しえたことのほうが重要なのであって、しかもそこに彼らが単なる俗流ではないゆえんも示されているのである。当然のことではあるが、そうした二面化は、元来商品ではない労働力に対して、本来的に価値形成的な労働としての把握をなし、他方で本来的には「社会」に外的な商品形態およびその極地としての資本形態に「社会」を認知するということから必然的に生じたものであったとせよ。すでに考察したように、彼らにこうした理解を成立させたゆえんしかもそこで体系的な対象の理論化として成立させたゆえんはやはり無視されてはならないし、またそうした理論化を可能とさせる対象の性格をも併わせて見出さなければならないはずである。彼らが、結局のところ、重商主義の否定者であり、したがってG—W—G'の意義を否定し、資本の根本的性格を取り出さなかったことは疑いない。しかし、その意義も、実は前述のごとき彼らの対象認識とともに真の理論的意義を



獲得しうるのもであって、その点からしてもそうした対象認識を汲みつつ、一般的定式と産業資本的形式との関係に産業資本の一面とされるべき考慮がなされなければ、「経済学批判」としての体系に十分即することになりえないであろう。